

〈一般投稿論文〉[研究ノート]

「も」の繰り上げ現象についての考察 —その選好要因と談話的機能をめぐって—*

稲吉真子

北海道大学大学院

The purpose of this study is to examine the preferential reasons that are used for the raising position of the focus particle 'mo' in Japanese. The following three factors were considered: first, the promotion of interpretation processing and its predictability display the speaker's synchronous stance in discourse. Second, for a wide interpretation, with the help of context. Finally, to avoid a complicated language form. The first two factors benefit the listener, and the third, the speaker. Thus, because there are advantages from both standpoints, a preference has evolved.

キーワード： 解釈処理の促進、予告性、談話的機能、解釈の増加と文脈の利用、形式の複雑化回避と簡略化

1. 繰り上げ現象について

1.1. 本研究の対象と目的

格助詞の後接対象が名詞、もしくは名詞+格助詞に限られるのに対して、とりたて詞は、名詞、副詞、述語、他のとりたて詞との結合など、多様な品詞に後接することができる。とりたて詞の後接関係に関する先行研究には、沼田・徐(1995)や青柳(2006)などがあり、主に焦点(focus)や作用域(scope)の観点から、後接する位置関係やそれに伴う作用域、移動についての統語的考察がなされてきた。しかしそれらの成果だけでは、以下の(1)の例に見られるような、後接位置の違いにおける選好性(preference)を説明することができない。

- (1) a. 時間も遅いから今日は帰ろうか。
b. 時間が遅いこともあるから今日は帰ろうか。

* 本稿は、第19回日本語用論学会での口頭発表を加筆修正したものである。発表においてコメントを下された方々をはじめ、投稿時にご助言を下された査読者の方々や編集委員会の方々に、この場を借りて心より感謝申し上げたい。

一般的に「も」の基本的な用法は、「文中のある要素をとりたてて、同類のほかのものにその要素を加えるという意味を表す」こととされる（日本語記述文法研究会 2009: 20）。いわゆる累加の用法であるが、この観点から (1) の例を分析すると、(1a) では時間の他に「遅い物事」があると解釈できる。しかし、実際の意味では、(1b) の「時間が遅いこともある」のように、他の「帰るべき理由」が同類のものとして想定されている。つまりここでは、意味的には節をとりたてているのに対し、形式上は語句に「も」が後接するという点で齟齬が生じていることになる。累加は通常、「も」が後接している要素をとりたてるのが基本であるため、対応関係にあるのは (1b) だと言えるが、運用上無標なのは (1a) である。

本稿では、このように「も」の運用において (1a) のような例が選好される要因について、語用論的立場から3つの要因を提示し検討する。

1.2. 類似する現象

「も」の使用に生じるような後接位置の移動現象は、英語の否定辞繰り上げ (Neg-raising) に類似する点がある。

- (2) a. I don't think he is reliable.
 b. I++>¹ I think he is not reliable.

英語の否定辞繰り上げとは、(2) の例に見るように、後方にある否定辞が前方に繰り上げられて使用されることを指す。これを広く、形式が後方から前方へ移動する現象と捉えれば、(1) も同様の移動を辿っていると言えるが、(2a) と (2b) には、構造的な差異の他に、それぞれが伝達する解釈の対応関係にも違いがある。

これについて、Levinson (2000) の「情報提供の原理 (Principle of Informativeness) : I原理 (I-Principle)」² を参照する。I原理とは、話し手が最小化して発話した内容を聞き手が増幅させて解釈するという、発話の情報提供性に関する格率である。その中の一例と

¹ “++>” は伝達する（「言われたこと」＋「推意されたこと」の和）の意。ここでは“I++>”となっているため、「I原理化で伝達する」の意。

² I-Principle

Speaker's maxim: the maxim of Minimization. "Say as little as necessary"; that is, produce the minimal linguistic information sufficient to achieve your communicational ends (bearing Q in mind).

Recipient's corollary: the Enrichment Rule. Amplify the informational content of the speaker's utterance, by finding the most specific interpretation, up to what you judge to be the speaker's m-intended point, unless the speaker has broken the maxim of Minimization by using a marker or prolix expression. (Levinson 2000: 114)

して、弱い矛盾を表す否定は、否定が強化された上で解釈されることが指摘されている。つまり、反対を表す強い否定である否定辞繰り上げは、その中に弱い矛盾を表す I 伝達を含むため、結果的に 2 通りの意味に解釈することが可能であるとされる。その一方で、(2b) の発話から (2a) の解釈を得ることはできない。このことから、否定辞繰り上げは、文字通りの読みより情報提供的 (informative) であるとも言われる。以上のような関係性は、「も」の繰り上げ現象に関しても同様で、(1a) は (1b) の意味にも解釈可能である一方で、(1b) は (1a) の意味には解釈できない。したがって、情報提供性の観点からも、英語の否定辞繰り上げと同様の現象であると言える。

1.3. 現象の比較から生じる課題

このように、移動の位置関係や伝達される意味の観点から考察すると、現象的には同様の類とする見方も可能ではあるが、英語と日本語では言語構造に大きな違いがある。英語は主要部左方型言語であり、文意味の決定において重要な要素が左方部に出現するのは、いわば理に適った現象であると言える。一方で、日本語は主要部右方型言語であり、なぜ日本語においても同様の繰り上げ現象が生じるのか、またそれが選好されるのかについては、別の要因が関与している可能性が考えられる。

そこで本稿では、繰り上げが選好される要因やそれがもたらす効果の点から、①解釈処理の促進、②解釈の増加と文脈の利用、③形式の複雑化回避と簡略化、の 3 点を提示し、それに基づき考察する。

2. 繰り上げ現象が生じる要因

2.1. 解釈処理の促進

位置の繰り上げが解釈処理に与える影響には、少なくとも 2 つの側面がある。1 つは、次に出現する要素や内容に関する情報を予告的に表示することで、聞き手に注意を向けさせ、解釈処理の促進を補助する面である。その一方で、早い段階で情報を提示することにより、かえって解釈に負担が生じる可能性もある。言語形式は発話された時点から処理されていくため、文意味を理解する上での要素がほぼ未出の段階で情報を提示すれば、その分聞き手が解釈を誤解して処理する可能性も高まる。加えてその場合、再解釈という余計な負担が発生する可能性さえある。

繰り上げが選好されるのは、この 2 つの側面の内、それにより生じる利益の方が優位に作用するためであると考えられる。以下では、この効果について、予告性の性質と、それにより生じる談話的機能の観点から詳しく考察する。

2.1.1. 予告性

以下の(3)は、同一の前件に対しそれぞれ異なる後件が後続しているが、いずれも文としては成立している。これらを文として成立させるためには、対象の要素が同一範疇³に属すると判断できることが必要となるが、この判断には2種類のものがあると考えられる。

- (3) a. 太郎も A 大学に合格した。次郎も A 大学に合格した。
 b. 太郎も A 大学に合格した。花子も B 大学に合格した。
 c. 太郎も A 大学に合格した。三郎も 就職が決まった。
 d. 太郎も A 大学に合格した。桜のつぼみも 膨らみ始めた。

1つは(3a)や(3b)のように、ともに同じ述語を有し、統語的關係により同一範疇であるという判断がなされている場合である。同じ述語を有していれば、太郎と次郎とが同じA大学に合格するという(3a)や、同じ大学ではないが、「大学に合格すること」を同一範疇として捉えている(3b)など、異なるカテゴリーが形成されていても良い。一方で(3c)や(3d)は、前件と後件の命題全体を同一範疇と見なすものである。⁴ この判断には個人差があるが、例えば(3c)では、2つの事柄をともに「次の進路の決定」と見なし、(3d)では2つの事柄を「春の訪れを感じさせる出来事」と捉えているといったことが考えられる。このように、前件の「も」が発話された時点では、後件に続く内容の詳細までは確定しないものの、「も」の表示により、次に出現する内容は、「前件に対し何らかの形で同一範疇だと見なせるもの」であるということが分かる。これを「も」の予告機能とする。

この予告性とは、「も」の累加における照応先があるという表示でもある。累加という機能から考えれば、未出の要素に対して別の要素を付け足すことはできないため、一般的には以下の(4)のように、「も」は、前方に出現した要素に対して、後続する要素が加えられることを表示する。しかし、(5)のように先に「も」が出現する場合もあり、(3)の例もこれと同じ構造をなしているのだが、このような場合は、後方の要素に照応先があることを予告的に示すことになる。早い段階で照応先があることが判明すれば、以後の内容に対する見通しが立ち、注意しながら照応先を探することができるため、聞き手の解釈処理を促進させる効果がある。

- (4) 太郎が来る。次郎も来る。
 (5) 太郎も来る。次郎も来る。

³ 加藤(2006: 97)では、「も」の基本特性は、同じカテゴリーに属するという判断(同一範疇判断)を示すことだとしている。

⁴ 稲吉(2016)では、(3a)(3b)のように統語關係に基づく同一範疇判断を「統語的同一範疇判断」、(3c)(3d)のように語用論に関わる同一範疇判断を「語用的同一範疇判断」と定義している。

なお、(4)のように、前件にある既出の要素が「が」など「も」以外の助詞でマークされている場合、後件の「も」が出現した時点で前件と後件との関係性が決定されることになるが、(3c)や(3d)のように位置が繰り上げられると、その分関係性の決定も早まるため、同様に、次に出現する要素や内容理解を助長する効果があると考えられる。

以上のような予告機能は、解釈を処理する際の補助となり、聞き手の理解を促進させる効果があると考えられる。

2.1.2. 談話的機能

(3c)(3d)を見ると分かるように、「も」は、同一範疇が節(命題)間で形成されている場合、位置が繰り上げられて使用されることが多い。しかしこれらの例では、対応する要素が言語的に明示されていたため、たとえ意味と形式が一致していなくとも、同一範疇だと判断できれば意味を理解することは可能である。一方で、会話中の使用では、対応させるべき要素が明示されていない場合も多くある。以下ではこの点について、予告性には、会話のやりとりにおいて、理解促進の他にどのような談話的機能があるのかについて検討する。

(6) A: もうエサがあまり残ってないね。

B: 陽ももうだいぶ落ちて暗くなってきたから、そろそろ引き上げようか。

(6)では、Bの発話だけを切り取ってみれば、「も」が発話された時点では「も」の他には「陽」という要素しか分かっていないが、一般的に考えれば、返答としてはそれに関連する内容が述べられると予測されるであろう。この時の「関連する内容」とは、直前にあるAの発話に対してであり、これをもとに「陽」以降に続く内容がどのような性質のものかを予測することができる。なお、この「内容」とは、話の具体的な内容ではなく、「賛成」や「反対」などの、より漠然としたものを指す。(6)では、魚を釣るために不可欠であるエサがなくなれば、釣りを続行するのは困難だと一般的には考えるため、この状況でのAの発話は、否定的な内容であると捉えられる。それに対しBが「も」を表示することにより、その時点で、Aと同じく否定的な内容を述べようとしている姿勢が示されることになる。⁵ 否定的な内容に同じく否定的な内容を加えるとはつまり、BはAの立場と同じ姿勢だということである。先の(3)では、「も」の同一範疇を形成するには、統語的關係によるものと、語用的關係によるものがあるとしたが、語用的關係によるものには、相手

⁵ なお、これとは逆に対比の「は」が使用された場合、同様の原理により、以下のように対比關係にある内容が述べられるであろうという予測がつく。

(1) A: もうエサがあまり残ってないね。

B: 陽はまだ明るいから、最後まで粘ろうよ。

の発話と自分の発話を同一範疇と見なすものもあり、これにより自己の立場が相手の発話に対して同調的であることを示す効果があると言える。⁶

このように、同一範疇の形成範囲が統語的判断から語用的判断へと拡大するにつれ、累加関係を整合させるための作業は増える。しかし会話においては、そのような論理的整合性だけでなく、むしろ同調的な会話を形成することの方が重要視されるため、従来の意味的な観点だけでは説明できないような例も多く見受けられると言える。

以上のような「も」の繰り上げ現象に生じる予告性は、高田・椎名・小野寺 (2011) で述べられている、話し手の考え (判断)・意図・動きを、コミュニケーションの相手である聞き手に伝えることにより、会話の意味を理解する手助けをするという談話標識 (discourse marker) の機能に一致する。さらにこれを Schiffrin (1987: 328) で挙げられている、談話標識の特徴に関する記述をもとに考察する。

- (7) 1. it has to be syntactically detachable from a sentence
2. it has to be commonly used in initial position of an utterance
3. it has to have a range of prosodic contours.
4. it has to be able to operate at both local and global levels of discourse, and on different planes of discourse

2点目の「通常、文頭で用いられる」という特徴は、1点目に挙げられている「文と統語的に切り離せる」という構造的特徴が関与していると考えられるが、「も」は付属語であり、単独で文頭に立つことはできない。しかし様々な位置に後接することが可能であるため、文頭近くに位置を繰り上げることで、「同様に」、「加えて」などの自立語のような扱いができ、同様に会話の内容理解を助長する効果があると考えられる。これについては、条件構文を文頭で接続詞的に用いることで、談話標識化する機能があるとする藤井 (2013) のような指摘もあるが、本稿では、そのような接続詞的扱いのできない「助詞」であっても、文頭近くまで位置を繰り上げて使用することにより、同様の効果があることを主張する。

⁶ 仮に A の発話内容と B の立場が同調的な関係でない場合でも、変わらず B の発話は成立する。

(2) A: まだ帰りたくないな。

B: 陽ももうだいぶ落ちて暗くなってきたから、そろそろ引き上げようか。

しかし両者には違いがあり、(6) が、B の述べる内容が A の述べた内容と同一範疇をなすものであると予告的に示すものである一方で、(2) のような「も」は、「陽」の出現以降に、照応先があることを表示するものだと考えられる。つまり、(3) の例と同じ「～も～。～も～。」という構造をなしていると考えられるが、そうすると、ここでは後者の「も」が明示されていないことになる。これについては、発話者が意図的に、後続する「も」の明示を避けているという可能性も考えられる。特に、上記の例のように理由節と共起する際には、例え理由が一つしかなくても、他にも何らかの理由があるかのように扱うことができるため、しばしばストラテジー的に明示が避けられる。このような用法について、稲吉 (2016) では、「疑似的な累加」と定義している。

2.2. 解釈の増加と文脈の利用

次に2点目の要因について検討する。青柳(2006)では、(8)の例を挙げ、この文脈では(8a-c)すべてにおいて、「太郎がピアノを弾くこと以外の出来事が起こったこと」を想定することができる⁷とされている。

- (8) 昨日のパーティーでは、花子がダンスを踊っただけでなく、
- a. 太郎がピアノを弾きもした。
 - b. 太郎がピアノも弾いた。
 - c. 太郎もピアノを弾いた。 (青柳 2006: 123)

通常であると、前件の「踊っただけでなく」との対応関係が最も明確であるのは(8a)であるが、後接する位置の違いに関係なく同義に解釈できる場合、やはり(8c)のような繰り上げが選好される。これは、先に見た予告性による効果が優位に働くためであるとも考えられるが、以下ではこれに加え、解釈の可能性の観点から考察する。

日本語と英語、両言語ともに、繰り上げが意味的に多くの解釈を持つという点については、1.2節で述べた通りだが、英語の否定辞繰り上げは、作用する範囲を拡大して解釈を増やすのに対し、日本語の繰り上げ現象は縮小により解釈を増やすという点において違いが見られる。日本語の場合、主節の動詞は文の右方部に出現するため、動詞に「も」が後接されれば、それまでに既出の要素には作用できないことになり、意味はより特定のなる。したがって、(8a)は(8b)や(8c)の意味には解釈できない⁸。その一方で、位置を繰り上げれば、解釈を広く設定することができる。

加えて、(8)の場合、たとえ前件と後件の発話形式が一致しなくとも、「だけ」の表示により、何が対比されるべきものかが明らかである。このように、既出の文脈は同一範疇を形成するための手掛かりとして機能する。なお、解釈のための手掛かりは、言語化されたものだけでなく、言語的に明示されていない情報も含まれる。例えば、先に挙げた(1a)「時間も遅いから…」では、完結した一文の中だけで見ると、意味と形式に齟齬が生じている上に、対応する先行詞も言語化されていない。しかしこのような場合は、「過度の残業は社訓で禁止されている」といった知識や、「ようやく作業終了のめどが立った」といった状況など、言語化されていない情報に、何らかの関連する事項が存在している可能性も考えられる。なお、これらは共有していなければならないわけではなく、聞き手も共有していた際に理解を促進させる手掛かりとして機能する。仮に共有していなかった場合、聞

⁷ 青柳(2006)では統語構造の観点からの考察がなされており、(8a-c)はすべて共通の深層構造から派生したものであるため、同義に解釈できると説明している。

⁸ この性質については、沼田・徐(1995)でも指摘されており、後接要素以前の要素にまで作用することは認められにくいとされている。

き手は話し手の発話を受け、推論により文脈情報を補充することも可能であるし、そもそも共有が明白であり、言語化する必要がないという場合もあるだろう。

以上のような周近的な要素の手助けもあり、意味と形式との間に生じる齟齬、もしくは対応する要素が言語化されていないという問題は中和される。その結果、問題を避けることより、いかに低コストで効率良く、かつ円滑に会話を進められるかという点が優先されていると考える。

2.3. 形式の複雑化回避と簡略化

最後に3点目の要因について検討する。今までに見てきた繰り上げ現象の用例において、意味と形式とを一致させるには、動詞や動詞句に「も」を後接させる必要があるが、その場合、先に見た(8a)や、以下の(9a)、(9b)のように、活用による形態変化が生じる。

(9) 太郎は文学にとっても興味があるようだ。

- a. 色々な作品を読みもするし、自分で書きもする。
- b. 色々な作品を読んでもいるし、自分で書いてもいる。
- c. 色々な作品も読むし、自分でも書く。

(10) 時間も遅いから今日は帰ろうか。 (= (1a))

(11) 北海道の夏は、気候も穏やかで過ごしやすい。

例えば(9a)では、「読む」という終止形を連用形「読み」に変化させ、転成名詞にした上で「も」を間に挟み込み、そして軽動詞「する」に接続させる必要がある。一方で、(9c)のように位置を繰り上げると、名詞句にそのまま「も」を後接できるため、上述のような形態変化を行う必要はない。したがって、構造的には同じ「～も～、～も～」の形であっても、動詞のように何らかの操作が必要なものと、名詞のようにそのまま後接できるものとは、形式面において、使用上の負担度合いに差があると言える。

次に、形式の簡略化についてであるが、先述のように(10)のような例は、意味的には「時間が遅いこともある」ことを示している。つまり、意味に形式を一致させる場合、「こともある」を加える必要がある。(11)も同様で、意味的には「気候が穏やかなこと」以外の、それに類する物事が想定される。このように、意味的に節をとりたてている例では、繰り上げに伴い「こともある」が不要になる例が多く、運用の中で使用頻度が多いものは、できるだけ冗長でない表現形式が好まれる。

最後に、これまでに挙げた形式の複雑さに関する例を俯瞰すると、異なる表現形式において同義の解釈ができる場合、運用上選好して使用される表現は、形式上の複雑さが少なく、その分負担も少ないと言える。一方で、有標となる表現は、形態の変化などにより形式上の複雑さが増し、また作用する範囲が狭まることにより、意味もより特定の傾向

向があると言える。

2.4. 要因に関するまとめ

以上のように、本稿では「も」の繰り上げ現象が選好される要因について、①解釈処理の促進、②解釈の増加と文脈の利用、③形式の複雑化回避と簡略化の3点に基づき考察を行った。1点目の要因は解釈に生じる負担を軽減させるという点でその他の要因にも関わるものであるため、これを繰り上げ現象の主因であると考ええる。加えてこの1点目の要因に関しては、解釈処理の促進の他に、相手の立場に対し同調的であるという姿勢を示す談話的機能が生じると論じた。従来の研究では「累加」という機能から、主に単語レベルを考察対象としたものが多かったが、「も」の同一範疇の判断基準には、(3c)、(3d)に挙げたような節(命題)レベルのものがあり、さらにその中には(6)のように、相手の発話を受けそれに応じる形で使用されるものもあるなど、使用状況は様々である。この同一範疇の形成の拡張に伴い、基本的な用法から、上記のような拡張的な効果が生じていると考えられる。

加えて、これら3点の関係性についてだが、①と②については、解釈処理における内容理解を促進するものであり、主に聞き手側に関与する要因であったが、③に関しては、産出する文自体の単純化を図るものであるため、これについては話し手側の負担軽減に関わる要因であると言える。したがって、「も」の繰り上げ現象における選好性については、「解釈処理を促進させたい」という聞き手側に関与するものと、「発話の複雑化を回避したい」という話し手側に関与するものの、双方の要因により生じるものであり、それぞれの要因は排他的なものではなく統合的なものであると考ええる。

3. 今後の展望

最後に、今回の考察の拡張として、今後の展望について述べる。繰り上げが生じる助詞は「も」の他にもあり、その他の助詞の機能としての汎用性も期待される。その一例として、「だけ」について述べる。

- (12) a. これは機内に持ち込むので、その荷物だけ預かってもらってもいいですか?
 b. 今夜宿泊予定なのですが、先に荷物だけ預かってもらってもいいですか?

(12a) (12b) を比較すると、位置の差異により、話し手の意図も異なっていることが分かる。(12a) の「だけ」は、複数ある荷物のうち、どの荷物が預かってもらいたい対象かを示している一方で、(12b) は、「荷物を預かること」だけをしてもらいたいという意味になる。つまり、(12a) は従来の基本的な意味で説明可能な用例であり、(12b) は繰り上げが生じている用例だと言える。このように、「だけ」のような他の助詞に関しても、本稿に

て考察してきた「も」の繰り上げ現象と類似する現象が見られ、これについても同様に、予告性により解釈処理を促進する効果があると説明できる。

加えて、本稿で論じた繰り上げ現象は、様々な研究に貢献できると考える。今回の議論は萌芽的論考であり、それ自体の追究は言うまでもないが、例えば解釈処理の促進について実験を行い掘り下げることや、他言語と比較することで日本語の特徴の一つとして提言することなどが考えられる。今後は、そのような点についても拡張して考察していきたいと考える。

参考文献

- 青柳宏. 2006. 『日本語の助詞と機能範疇』東京：ひつじ書房.
- 藤井聖子. 2013. 「現代日本語における条件構文基盤の談話標識（化）——その形式と機能に関する類型試案——」、『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』20、87-101. 東京：東京大学大学院総合文化研究科.
- 稲吉真子. 2016. 「「も」の同一範疇判断に関する語用論的考察」、『研究論集』16、149-158. 北海道：北海道大学大学院文学研究科.
- 加藤重広. 2006. 『日本語文法入門ハンドブック』東京：研究社.
- Levinson, Stephen C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass: The MIT Press. [田中廣明・五十嵐海理（訳）].
2007. 『意味の推定——新グライス学派の語用論——』東京：研究社]
- 日本語記述文法研究会. 2009. 『現代日本語文法5 第9部とりたて 第10部主題』東京：くろしお出版.
- 沼田善子・徐建敏. 1995. 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」、益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主語と取り立て』、175-207、東京：くろしお出版.
- Schiffrin, Deborah. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge U.P.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子. 2011. 『歴史語用論入門——過去のコミュニケーションを復元する』東京：大修館書店.